

ったが、現在性や未来性の問題の解明に対する著者への期待は筆者個人にとどまることはないと思われるので、今後の著者の思想史の解明を願っている。重ねて言うならば、宗学や化学の発展のために、「たのしい仏教学」の浸透を切に願いたい。それは華嚴禪の成立

を明らかにするにとどまらない問題であり、著者のいう思想史の解明をそれゆえに本書の後に期待する次第である。

(大東出版社、昭和六〇年三月一日発行、A5判、本文三五八頁、英文レジメおよび索引二八頁、七、〇〇〇円)

鈴木哲雄著

『唐五代の禪宗——湖南江西篇——』

永井政之

一

今般、大東出版社より、「学術叢書禪仏教」

シリーズの第一弾として、愛知学院大学鈴木哲雄先生の労作「唐五代の禪宗——湖南江西篇——」が上梓された。

大先輩の著作に対して、今更筆者ごときが卑見を述べるなどは、いささか礼を失するものと感じられるが、同じ分野を志す者として何のコメントもしないというのも、また失礼に当るかとも思われる。かく迷いが無いわけ

でもないが、敢えて筆を執り、あくまで内容紹介を中心として論を進めたいと思う。

ところで、周知のように著者は、かつて本学大学院に学ばれ、その間荷沢神会を精力的に研究、さらに愛知学院大学に奉職されて以後は、本書の基礎作業ともなった江西、さらに浙江・福建など各地における禪者の動向を研究されている。

その間「中国禪宗人名索引」(昭和五〇年、其弘堂)を刊行され、本昭和六〇年三月、「南宗禪の発展過程の研究」の論文により、

駒沢大学より文学博士号を取得されている。本書収録以外の地域について考察した学位論文は、近々刊行の予定とも聞く。

かくして本書は、右のような著者の学問の中核とも言うべきものである。そして先の「人名索引」と、言わば相互補完の関係にあることも自明である。人名索引は、一見変哲のない内容である。それをカード採録と配列という根気はいるが、しかし単純作業の結果と見なす人もあるかも知れない。しかしそれは誤りである。著者はあえて法諱を主として配列せず、慣用的な呼称に重点を置いて配列する。↓の印も少なくない。そのような配慮の結果として、ある特定の寺院や山、地域に住した人を、一箇所に集中して並べうるという利点をもたらす。ここに著者の深謀遠慮が潜む。たとえば、百丈山に住した人を見ると、百丈安、百丈以棲、百丈惟政、百丈維古、百丈懷海、百丈月、百丈元肅、百丈恒、百丈浄悟、百丈暹、百丈智賢、百丈智映、百丈超、百丈道恒、百丈涅槃、百丈明雪となる。これらの人々が江西省の百丈山を中心に活躍することが判明する。

「人名索引」の刊行から一〇年、このような人名を歴史的・地域的にどのように捉えて

位置付けるかに苦心して成ったのが本書である。

二

さて、著者鈴木氏は「はしがき」の一段において、本書の性格を捉えて、「研究の工具」と述べられる。確かに、膨大な資料を縦横に駆使しての立論は、さまざまな情報と示唆を与えてくれる。著者の真意とは離れるかもしれないが、今流行りの中国旅行でも、江西湖南を旅するためには、——少なくとも仏教者の団であるかぎり——必携の書とも言える。

それはともかく、この書を手引き書の意味での工具書と捉えることが的確なのであろうか。

筆者は必ずしも本書が工具書の位置にはとどまりえないと思う。

実際、鈴木氏が命名されたその書名は、かなり重要な意味を持っている。一つは、唐五代ということ、一見、六祖慧能以後の禅宗の動向に限定したかの如き感を与える。ところが今日、禅思想という言葉で喧伝されるものの過半が、この時代に成立したことを考慮するならば——先例にならってこれを純禅と呼ぼう——右の語は、時代の限定どころか、純

禅そのものを扱うという著者の自負の結果とも見なしうる。第二は既述の「江湖」である。

一般に、南宗の禅が、南宗の禅たりうる。つまり中国人の宗教として、本格的に中国人の生活に入り込む姿勢をとるのがこの江湖の地であった。そして、今日でも「江湖会」の語が、結制をさすものとして生きているように、江西湖南の地は、中国禅の歴史にとつて、極めて重要な意味を持つ。それは単に地域の限定にとどまらず、そこで宣揚された宗旨にもかかわる。浙江に五山制度が確立し、禅僧が大伽藍に住し、好むと好まざるとにかかわらず国家体制に組み入れられるのは南宋であるし、それ以前、すでに北宋代にも、東京（開封）相国寺を中心とした、禅と皇室との結びつきは認めうる。

とすると、唐五代と江湖を結びつけた本書は、すでに工具書の範疇を超えて、いわば純禅の時代を、一応「湖南江西」と地域的限定を与えつつ、しかし総括した書というのであろう。もちろん、思想的な側面で検討を加える余地はまだ十分に残されているところではあるが、それは本書の直接の目的とするところではないのであるから、言及する必要はない。

いったい、著者が「はしがき」において略述されているように、禅宗史の研究は、所謂敦煌文書の発見以後、急速なる転回と発展を遂げる。それははじめ、敦煌文書が直接関係する初期禅宗の分野にはじまり、以後、確実に唐末五代を経て宋元代のそれに至るまで、方法論の再検討とともに、新たな視座をもつての研究がなされつつある。

すでに禅宗史の研究は、単に禅宗教団内部の研究にとどまらず、少なくとも中国思想史のワクで括られる部分にまで及んでいると言えよう。

それでも限られた数の研究者と、膨大な資料の山との対決は、一つ一つの研究の積み重ねのみが解決をもたらすものと言えよう。

話が若干横道にそれたが、要するに本書は、かつて先達が試み、また現代においても試みられている右のような方法論の上で、一つの方向を示唆したと位置付けうるであろう。すなわち、著者は「はしがき」で本書の目ざすところを

筆者は、中国という広大な国土の全国各地に根づいた禅宗を、一度地域という目で見て、そこに特徴や傾向や相互関係を見出

せないものか、禅宗教団が実際に地域的にどのような姿で発展していったかを明らかにできないものかと考え、拙い研究を続けている。禅思想が時空を超えるものであるとすれば、この見方は一見矛盾する研究手段のごとくに見えるが、禅思想は觀念の遊びではなく、现实生活に即するものであることからすれば、時空の制約の中で時空を超えているのである。時空の制約そのものが、生きていくこと、であり、地域の限定を受けていること、である。現実そのものは時空の制約を離れられない。しからば地域的に区分して見ることは禅宗史研究の中で一分野を確立できると信ずる。例えば綾は見る方向によって濃淡が生滅し、紋様も浮かびかつ消える。事実、このような地域的な目で見ることによって、新たな紋様をつかむこともできる。その紋様は綾の全体ではないが、見えなかったものが、或はかすかでよくわからなかったことがはっきりしたとすれば、綾を一層はっきりさせたことになる。所詮学問は手段であり方法に依らねばならぬ。手段方法は制約を持つ。多彩な手段方法で綾の全体像を捉えようとするのが学問であろう。地域的に見るという

ことも一手段・一方法となる。と述べる。

ところで、禅のみならず、中国の仏教全体を個々の寺を中心に捉えようとした先達は少なくない。大正一〇年前後、数度に亘り訪中され「中国文化史蹟」一二巻などの業績をものされた常盤大定氏は、その名実ともに代表とも言いうる。ただ惜しむらくは、浄土真宗に属された常盤氏の禅の遺蹟に対する関心には、今一つ物足りない部分が残る。勿論だからといって常盤氏の業績が損われることは決してない。

文化大革命後、再び寺廟の修復が大大的になされる中で、常盤氏の成果が清末民国代の遺構を、写真や拓本などの資料をもって今日へ伝えていくことを考え合わせるなら、その資料としての価値は、ますます増大するものと言えよう。

このように中国の大地に即して、中国仏教を捉えようとする試みは、本来なら、継続的かつより網羅的になされるべきであったが、戦争を含む諸般の事情がそれを許さなかった。また、斯学の当面の課題が敦煌文献を中心とした初期禅宗史の解明であったことも理由の一つと言えるかもしれない。

近年、中国側の門戸開放政策により、參觀の自由がかなりの中で認められるようになった。それらの報告は、量の面ではすでに常盤氏の參觀数を上まわるものの、質の面では、今一步の感を免れない。訪中する側の関心が、特定の地域を除いてもう一つ盛り上らぬことや、準備の不足が挙げうる以上に、中国側の事情がそれを許さない。

本書がとりあげた江西湖南が重要であることは自明であっても、実際に調査を試みえた例は極めて少ないし、具体的な報告となると暁天の星の如くである。大体、資料の面からこの地を総合的に研究した例を、筆者は寡聞にして聞かない。

かくして、従来、タテの流れが中心となつて論じられることが多かった禅宗史研究を、限定的ながらヨコに視点を据えて捉えようとした本書は、あくまで立体的な視野を意識したものと見て、今後の禅宗史研究の方向の一つを示唆したものと言えよう。右のようなことは、本書で扱われる資料についても言えることであって、灯史を中心に置く一方で、地方志・金石文・正史など、これも従来、個別に利用されがちであったものを、横の輪の連関において十分利用されていると言えよう。

ここで、本書の内容を目次にしたがって記しておく必要がある。

△本書の内容▽

はしがき

第一章 湖南地方の禪宗の展開

第一節 地理的歴史の概観

第二節 開拓期の禪宗

一 動向

二 長沙府（当時、潭州、長沙郡）

三 衡州府（衡州、衡陽郡）

四 澧州（澧州、澧陽郡）

第三節 伸張期の殷賑

一 動向

二 長沙府（潭州）

三 衡州府（衡州）

四 岳州府（岳州）

五 常德府（朗州）

六 郴州（郴州）

七 澧州（澧州）

第四節 維持せる隆昌前期

一 動向

二 長沙府（潭州、欽化軍節度、武安

軍節度、長沙府）

三 衡州府（衡州）

四 宝慶府（邵州、敏州）

五 岳州府（岳州）

六 常德府（朗州、永順軍△武順軍▽
節度、武貞軍節度、武平軍節度）

七 郴州（郴州、敦州）

八 澧州（澧州）

九 衡州府（衡州）

第五節 衰頹せる隆昌後期

一 動向

二 長沙府（武安軍節度、潭州長沙郡）

三 常德府（朗州、武貞軍節度、武平
軍節度、朗州武陵郡、鼎州）

四 郴州（郴州、郴州桂陽郡）

五 澧州（澧州、澧州澧陽郡）

六 岳州府（岳州）

第二章 江西地方の禪宗の展開

第一節 地理的歴史の概観

第二節 南宗発展の基礎なる開拓期

一 動向

二 南昌府（洪州、予章郡）

三 廬山

四 瑞州府（靖州、米州、筠州、洪州）

五 袁州府（袁州、宜春郡）

六 臨江府（洪州・袁州・吉州の各一
部）

七 吉安府（吉州、廬陵郡）

八 撫州府（撫州、臨川郡）

九 広信府（唐初饒州、当時信州）

十 饒州府（饒州、鄱陽郡）

十一 贛州府（虔州、南康郡）

第三節 唐代の禪宗を代表する伸張期

一 動向

二 南昌府（洪州）

三 廬山

四 瑞州府（洪州）

五 南康府（洪州・江州）

六 袁州府（袁州）

七 臨江府（吉州）

八 吉安府（吉州・袁州）

九 撫州府（撫州）

十 広信府（信州）

十一 饒州府（饒州）

十二 贛州府（虔州）

第四節 南宗分派化の進んだ隆昌前期

一 動向

二 南昌府（洪州、鎮南軍節度）

三 廬山

四 瑞州府（洪州）

五 南康府（洪州・江州）

六 袁州府（袁州）

七 臨江府（吉州そして筠州・吉州・
饒州の各一部）

八 吉安府（吉州）

九 撫州府（撫州、昭武軍節度）

十 建昌府（撫州、昭武軍節度）

十一 広信府（信州）

十二 饒州府（饒州、安化軍節度、永平軍節度）

十三 贛州府（虔州、百勝軍節度）

第五節 法眼宗の進出せる隆昌後期

一 動向

二 南昌府（洪州、鎮南軍節度、南都南昌府、洪州予章郡）

三 廬山

四 瑞州府（筠州）

五 南康府（江州・洪州、南康軍）

六 袁州府（袁州、袁州宜春郡）

七 吉安府（吉州、吉州廬陵郡）

八 撫州府（撫州、撫州臨川郡）

九 建昌府（撫州、建武軍、建昌軍）

十 饒州府（饒州鄱陽郡）

年表

系譜

地図

索引

ちなみに、著者がとる時代区分は次のとおりである。

開拓期

石頭・馬祖等の世代まで

伸張期 薬山・百丈等より洞山・臨濟等まで

隆昌前期 雲居・雪峯等より同安志・曹山義崇等まで

隆昌後期 帰宗道詮等より『景德伝燈録』の世代まで

ただし著者は、玄沙の系統については「他の時代の年代と近くなる」として、一世代繰り上げてゐる。すなわち、

隆昌前期 雪峯・玄沙より清涼文益等まで

隆昌後期 報慈文遂・円通縁徳等以下とされる。

ところで既述のように江湖の語が、時の禅宗界を代表する語であるのは疑いないが、問題は日本人たる我々が、「代表する」が故に、江西湖南を、あたかも一枚岩のごとく錯覚する点にある。広大な中国の地で、臨接するからと言って、同じように捉えてしまう愚は今さら言うまでもない。風土の違いは今日にも存在する。当然そこに展開する禅も自ずと影響を受ける。

著者は、この点にまず留意して、江西の禅者と湖南の禅者の持つ意識を次のように特徴づける。

開拓期においては、江西の禅宗が、北の

湖北の四祖・五祖の住した韶州雙峯山と、

南の広東の六祖の住した韶州曹溪の中間に位置する関係で、四祖・五祖・六祖という

南宗の伝燈の意識が濃厚に漂う中で進出していったのに対し、湖南の方は、都長安より湖北を介して湖南へという北から南、都

から地方という線の上で進出し、一方、六祖の韶州から湖南へ、即ち南から北への進出という伝燈意識も背負っていたとみられる。

北から南の湖南へは、北宗系、南宗の荷沢宗系が流入し、南から北の湖南へは、南嶽・石頭に代表される南宗系が進出して

いる。その接点は南嶽にあった。

（本書、p.6）

筆者の拙ない訪中経験から言っても、江西と湖南の持つ雰囲気は異なる。それはともかく著者は結論として、湖南の初期の禅の中心となるのは南岳衡山であるとし、懐譲と希遷の動向に注意を払う。江湖と言うからには、章立てを江西湖南の順にすべきでなかったかと思われようが、馬祖を打出した懐譲の立場は重要であるし、著者の言に従い、次代での動向は、湖南により見るべきものがあるとするなら、湖南↓江西の配列でよいのかもしれない。

このような前提のもとで、著者は各地における、灯史に記載された限りの禅僧について、その伝記をはじめとして、所住の寺院の所在地、歴史の変遷などについて述べる。

細部に亘つてのコメントは紙数の問題、さらに著者の利用した資料、あるいはそれ以上の広範なる資料を点検する必要がある、時間的にも能力的にも、筆者の能くするところではない。従つて、ここでは著者にして初めて明らかにされた点についていくつか指摘しておこう。

たとえば「折床会」は従来、東寺如会のあだ名とされてきた点を、馬祖の坐禅道場を指すとしたこと（本書、p.27）。また靈祐が瀉山に入る過程での、司馬頭陀のエピソードを史実ではないと断じたこと（本書、p.32）。薬山の没年を、太和二年（八二八）ではなく、太和元年と決論つけたこと（本書五、p.53）。蒙山慧明と仏川慧明を別人としたこと（本書p.125）。百丈惟政・法正・涅槃和尚を、畢竟同一人とみたこと（本書、p.144）。

さらに著者の解明された点は、右の範囲にとどまるものではない。当該の禅者に関係した帰依者などについてまで、出典を挙げつつその伝記・思想を詳述した点——例えば薬山

と李翱・温造、馬祖と権徳輿・裴諤・路嗣恭・鮑防・包估など、これは枚挙に暇ない——、従来の諸説を整理し、理解を簡便ならしめ、かつ問題点を指摘した点——洞山良价・西堂智蔵など——、新らたなる資料を提供された点——例ば禾山無殷の徐鉉の「碑文」、雲蓋懐溢の「碑銘」などは、陳垣「釈氏疑年録」の成果を承けたものであるが、その紹介は本書が初めてであろう——など、極めて綿密な論が展開される。

かくして大雑把に言うと、湖南で重要なのはやはり南岳であり、瀉山・道吾山・石霜山などのある長沙府、薬山・夾山のある豊州、徳山のある常德府などの動向も見逃しえぬことなども著者の指摘によって理解しうる。

また江西では、やはり馬祖とその派下の人の動きからみて南昌、さらに廬山、洞山のある瑞州府、曹山や疎山のある撫州府などが重要であることも判明する。

ところで、第二章第五節の「法眼宗の進出せる隆昌後期」は、頁数は少ないものの、やはり重要な一段であろう。著者は夙に、雪峰下の人人の動向に注意を払われたことがあり、この一段は、それらの論考と無関係ではない。

南唐の支配下、江西の禅刹を席捲したのが法眼宗であるとされるのは、実に著者にして言えることであろう。従来、閩の王氏と雪峰の関係、あるいは呉越王銭氏と法眼宗との関係が前面に出るあまり、浙江や江蘇での法眼宗の展開は意識されても、江西のそれについて詳しく論じられることはほとんどなかった。この点、著者は、

法眼宗の祖清涼文益については、金陵の清涼院に住したという意識から、金陵に於て多くの弟子たちを輩出したかの観を持ちがちであるが、前住の地、曹山崇寿院における教化活動によって、天台徳韶をはじめとする有力な上足を出しているのである。南唐が国を建てるに及んで、金陵に招かれ金陵で一段と発展した。法眼宗はまず、江西の各地に分散し発展した。法眼宗の発展の勢いは江西にあり、また南唐に迎合する以前の法眼宗の素顔は江西にあったのである。

（本書、p.275）

と断定されている。かつて筆者も、拙論をなすに当り、同内容の御教示を得、金陵へ進出する法眼宗の動向について眼を開いて頂いた経験を持つ。著者の言に従うなら、法眼宗の

立場は、それ以前の、いわゆる純禪の立場から一步後退したものと見え、北宋、さらに南宋へと続く、国家仏教化の先駆となったとも見なしうるのである。しかしそれは法眼宗のみの責に帰しうるものではない。著者がいみじくも、

国家権力が宗教政策に一步踏み込んできたわけである。(本書、p. 276)

と言われるように、国家の側もまた禪宗教団に目を向けたのである。法眼宗の動向は、単に禪宗界全体の意識を代表したにすぎない。国家権力が、一つの文化として禪を捉える一方で、禪の側もまた自らの勢力拡張のために権力へ迎合していく部分があったのではないか。「禪苑清規」の世界は、すでに聖節を祝うことに抵抗をみせない。さらに玄沙やその派下の人人の「首楞嚴経」重用の事実も、もう一度考証しておく必要もあろう。周知のように「首楞嚴経」は「円覚経」とともに、宋代の禪者にとって必読の書であった。北宋、

長水子璿の「首楞嚴経義疏」も大いに流行する。その巻二の一段、「真如の体は即ち一心なり。一心と真如、および生滅の相と、二なく別なし。三に即して一を明し、一に即して三を論ず。故に治生産業、皆な実相と相違

背せざることを得。已界仏界衆生も亦た然り」の一言は、すでに「法華経」(法師功德品)を引用しつつ、真実相と現実相が異なるものでないことを力説する。

右のような立場は、禪が現実の社会に対応していく上で、理論的根拠になりえたのではないであろうか。

禪の体制迎合への萌芽を法眼宗に見うるとする時、それは「首楞嚴経」依用と、別のものではなかったと、筆者はみておきたい。そして国家は、いわば現実相の代表格と言え、国家との対応は、実に社会との対応であったとも言えるであろう。

三

以上、大概ながら、本書についてその刊行の意義を述べたつもりであるが、最後に蛇足の意を述べておく。筆者の気付いた点に触れておきたい。

まず依用された通志の類であるが、できることなら、今少し府志・県志の部に入りこんで利用されるべきではなかったか。と言うのは、中国におけるこの種の書の例として、地方の情報を、中央で編集して刊行するというのがふつうであり、その間に、現状との誤り

が生じる場合が少なくないからである——右のような例は実は現代にもある。地方志ではないが、近年刊行の「中国名勝詞典」などは、各地の文物管理委員会の報告を纏めたもので、文章は現存するかのごとき感を与えるのに、現地では何もなく、訪問が徒勞に終わったことや、その逆の例もあったりする——。

そして、言わずもがなであるが「里」は華里であって、日本の一里ではない。

もちろん位置の確定のみが主目的ではないから当面は必要ないであろうが、例えば各種公立図書館収蔵になる、旧日本軍作製の中国地図も、五万分の一のものなど、かなり精密に製作されたものもあるから、利用しない手はないであろう。

以上が第一点であり、以下は、さらなる蛇足である。

まず著者は、曇晟の住した雲巖の所在を、「湖南通志」巻一七によって、茶陵州(攸県)の東二〇里と指定されている(本書、p. 34)。茶陵と攸県を同一とみられるのは「通志」と灯史の記述を合体させたものであるが、この合体は可能かどうか。ちなみに「大清一統志」巻三五四「長沙府表」によると、攸県と茶陵とは、これも臨接はするが、同一ではない。

各時代を通じて攸県は攸県と呼ばれ、茶陵は
 県・軍・州と名を変えても、茶陵であった
 （但し隋代を除く）。

とすると、「茶陵（攸県）」となしうるか。

筆者は、やはり「湖南通志」や「大清一統
 志」の言う、「茶陵州東二〇里」の雲巖は、
 曇晟の住した雲巖ではないと思う。「祖堂集」
 卷五や「伝灯録卷」一四では、曇晟の活躍の
 地を攸県に求めている。少なくとも筆者は、
 「攸県の雲巖」が正しく、通志の雲巖は、曇
 晟の故地ではないとみておきたい。さらに著
 者が年表の項でも記されるように（本書、p.

323）、江西省義寧州（唐宋の分寧県、清では
 南昌府）にも雲巖があって、清代には曇晟の
 故地とみられ、また北宋以後では黄竜派の住
 山も知られる。竜山徳見もここに住する。勿
 論、これは本書の取り扱う範囲の外ではある
 のだが。

また道吾円智の塔が建てられた場所をめぐ
 っては、著者は、

道吾は道吾山で入寂し、石霜は意を体し
 て、道吾山の西南にある石霜山に建塔した
 とみることも可能で、道吾の入寂地を石霜
 山と決めてしまうこともできない。

（本書、p.36）

と決論を保留されている。これは著書も述べ
 るように、「伝灯録」卷一四の末尾の文の判
 読にもよるのであるが、すでに佐藤秀孝「石
 霜山の変遷とその現況」〔中国仏蹟見聞記五〕
 も指摘するように、南宋の石田法薫の「行状」
 は、道吾の塔はもともとは道吾山に建てられ
 たが、老いた慶諸が礼塔しやすいようにと、
 雷によって石霜山に遷され、ために雷遷塔と
 呼ばれたことを記す。これを単なる後世の伝
 承とみるか否か。一考に価するのではない
 か。

以上、極めて雑駁ながら、鈴木氏の労作に
 ついての紹介をなした。紹介といっても、そ
 の内容の一一については触れえなかったの
 は、先にも述べたように著者が利用された数
 多くの資料を、再点検して是非を云々する能
 力も時間も、筆者にはなかったからである。

多く本書の位置付けに紙数をさいたのも、右
 のような事情によるし、実は筆者の目ざすと
 ころも、何とか中国の大地に即して、禪宗史
 を捉えたいと思っているからである。雲巖や
 石霜に言及しえたのも、偶然ながら、数年前
 に彼の地を訪問する機会があったからであ
 る。

かくして筆者としては「弄巧成拙」の感を
 否めないのであるが、この紹介が本書の重要
 性を損わねばと念願し、鈴木先生の今後の御
 活躍を期待して筆を擱きたい。

（六〇・六・一四記）

（大東出版社昭和五九年七月一六日発行、A
 5判、三六三頁、索引四八頁、七五〇〇円）